

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	梁啓超の学者像について : 日中における異なる評価を中心に
Author(s)	張, 淑君
Citation	表現技術研究 , 16 : 121 - 135
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50856">10.15027/50856</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050856">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050856</a>
Right	
Relation	



# 梁啓超の学者像について

## ―日中における異なる評価を中心に―

張 淑君

### はじめに

梁啓超は一九一七年十一月に中華民國財務総長を辞職してから一九二九年一月に逝去するまでの間、とりわけ一九二〇年三月の欧米遊歴のあとには、政治活動から遠ざかり教育活動や学術研究に専念するようになった。彼はまず清華大学や南開大学などで講義を担当しはじめ、一九二五年には清華大学の国学研究院に招聘され、大学教授として余生の大半を過ごした<sup>(1)</sup>。

梁啓超に関する研究は中国大陸だけではなく、日本、アメリカと台湾などでも広範にわたってなされ、専門著書が出版され、数多くの論文も発表された。今までの研究成果をまとめてみると、主に梁啓超の政治活動、政治思想、文学活動、経済思想などを中心に行われたものであり、学者としての梁啓超という側面からの研究は少ない。京都大学人文科学研究所梁啓超研究班が行った共同研究の成果である『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』においては、梁啓超が「言論界・学術界のスーパースター」であることを強調したものの、前述した晩年の大学における彼の活動及び評価については、あま

り詳細な論考がなされていない<sup>(2)</sup>。

そこで筆者が新たに蒐集した資料と既存の資料とを読み合わせ、同時代の日中両国の知識人がどのように梁啓超及びその学術研究・教育活動を評価していたかを考察し、かの時代の日中両国の知識人の目に映った梁啓超の学者像をより立体的な視点で捉えてみたい。

### 一

『梁啓超年譜長編』を確認してみると、長らく思想界や新聞界や政治界の風雲児であった梁啓超は一九一七年十一月に華やかな政治世界から身を引いた。一九二〇年三月に欧米遊歴より帰ってからの一年間は、自らの著述活動以外に、中比会社を創設し、中国公学を引き継ぎ、共学社を組織し、さらに雑誌『改造』を整えるといった様々な事業を行った<sup>(3)</sup>。その後、一九二〇年十二月二日からは、かつて長女梁思順に教えた国学を清華大学において講義し始めた。ちなみに、一九二三年九月六日に梁思順に宛てた手紙で、梁啓超は、これからも清華

大学に講義をしに行きたいと明言している<sup>(4)</sup>。一九二五年、彼は清華大学国学研究院の教授に着任し、自らの研究のみならず、研究院の日常事務も取り仕切るようになった。これについて、当時彼の助教を務めた蔣善国は、次のような回想文を書き残している<sup>(5)</sup>。

梁任公（啓超）氏は国学研究院で中国文化史の授業を担当されていた。（中略）その翌年、私は梁任公の専属の助教として彼の学生教育を手助けした。（中略）当該研究院は吳雨僧（宓）氏を主任として、五つの研究室を設置した。（中略）梁任公氏は生来活動的であり、素晴らしい指導力を持っていたため、彼は研究院で務めた時に事実上一切の事務を取り仕切り、（彼の仕事は）学生教育に限られていなかった。（中略）研究院が設置されたとき、五つの研究室の中で王静安（国維）氏と任公氏の二人にだけはじめから助教が配属された。（中略）王静安氏の学問は奥深いが、梁任公氏の学問は範囲が広くて、任公氏自身も組織力を持っている。

一方、政治家ではなく、学者としての梁啓超の印象については、北平蒙藏学院国文教授の王森然も同様の見方を示している<sup>(6)</sup>。

（民国）九年の春、帰国し、（中略）著述に専念し、文史を編纂し、（中略）このように十年も政界から遠ざかり、学術に専念し後の学者に影響を与えた。（中略）彼の学識と文章は、同時代の人々に高く評価されていた。（中略）現在の中国においては、その学識と文章が名声を博しており、慈愛をもって学生たちを助け育て誠意を

もって指導する、梁氏のような人は恐らくいないだろう。なんと当代に比類ない文学の大家、素晴らしい師であるか。

ところで、梁啓超本人は、自分の新たな身分である大学教授という立場をどのようなものと捉え、学術研究にどのような態度で臨んでいたのだろうか。以下においては、先行研究にあまり取り上げられていない梁啓超の手紙に着目したい。

まず、一九二七年に彼がアメリカに留学していた長男の梁思成に宛てた手紙を見てみよう<sup>(7)</sup>。

思成の学業に関して、私にはいささか意見がある。思成の専攻はあまりに専門的に過ぎるから、私の希望としては、卒業後一、二年は少々時間を割いてもっと常識を学んでもらいたい。（中略）それから、友人と交際して何かを得よう、あるいは書物を読んで何かを得ようとする人間も、分野を少し広めにしておいてこそ、議論を通じて交流したり、書物によって進歩したりする機会を得られるというものだ。（中略）我が国では古来、先哲が人に学問をする方法を教えるに際して、道の気象に悠々と浸らせ、その人に自ら体得させることを最も重んじた。（中略）およそ学問をする場合には、「猛火熬」と「慢火燉」という二つのやり方を、交互に入れ換えて用いなければならぬ。（中略）思成よ、おまえはすでに三年間「猛火熬」をくぐってきた。これからの一年はまさに「慢火燉」を用いるべき時にほかならない。

ここでは、梁啓超は一人の父親として、また一人の学者として、自分自身のこの数年間にわたる研究の経験に基づき、梁思成の研究の幅が狭くならないように注意を促している。つまり、専門研究はもちろん重要であるが、学問の視野を広げ、中国の古典を読んだり、友達と談義したりすることによって幅広い教養を身につけるのも、学者として成長するために重要であると梁思成に教えたのである。これはある程度において梁啓超自身の学者として学問研究に対する態度を反映しているのだろうか。

続いて、下記の二通の手紙も見てみよう。

① 帰国後のおまえたちの職業先については、いま各方面に打診している最中だ。(中略) 一つは東北大学の教授であり、(中略) 一つは清華学校の教授だが、成否はいずれも分からない。(中略) 私は人に紹介を頼んでおまえをあちらの家に何かせ(中略)、何か月か彼の義務書記〔無給の書記〕にしてみらおうか考えている。もしそれが実現すれば、おまえの学問の前途にとって絶好の機会だ。(中略) 「中国宮室史」はまことに一大事業だが、私の見るところでは、一気呵成に成功させるのは非常に難しいだろう。なぜなら古建築は九割が破壊されており、現存するものについても、兵乱の影響で、内地に赴いて実地調査する手だてがなく、文献資料に頼る以外は(中略)、北京で〔実地調査〕着手し得るのみだ(中略)。それゆえ私はおまえがおまえの副次的な仕事―すなわち「中国美術史」に意を注ぐことを望む。この仕事だったら、私は部分的におまえを十分指導できるし、何とかしておまえに多くの歴代の名

家の作品を見せてやることだってできる(8)。

② 昨日楊廷宝氏が来られて東北大学のことに言及された。(中略) 廷宝氏の話によると、奉天は建築事業が極めて発達しているが、技師は一人もいない。あちらで教授として勤めると同時に、営業所を組織することもできる。足元を固めておくと、前途洋々であり、(中略) 清華大学に就職する申請も評議会に提出した。ただこの二つの仕事を比較したら、やはり東北大学のほうがより前途が開けているだろう。清華大学は温柔郷(ぬるまゆ)であり、おまえがそのような優れた環境に甘んずることをよしとしないという私と同じような考え方を持っていることを私は願っている(9)。

手紙①で、梁啓超は留学を終えて帰国しようとした梁思成に学術研究に最もふさわしいところを薦めた。また、学者の立場から、客観的に当時の時勢や学問の難しさを述べた。さらに、手紙②で、清華大学と東北大学を比較し、清華大学は教育環境と生活環境が相対的に優れているが、東北地方は建築事業の発展が著しく、前途があると考えたので、アメリカにいる梁思成の代わりに清華大学の招聘を断り、東北大学の招聘に応じることにしたと述べる。これらの内容から考えると、恵まれた環境に溺れることなく、苦しい環境で学問をする訓練こそが研究者にとって必要であるというのであり、学術研究を第一とする梁啓超の考え方が窺える。

以上の資料から、中国においては、晩年の梁啓超は政治活動から遠ざかり、学術活動に専念したことがわかる。彼は、清華大学国学研究

院の教授として学術研究・教育活動の両面にわたって高い名声を得ていたことが窺える。一方、梁啓超も、自らの教育者・学者という経験を生かして、学者としては学術研究を最優先しなければならないという考えを、大学教員を目指している梁思成夫婦に教えた事実が浮き彫りになった。つまり、中国においては、晩年の学者としての梁啓超は同時代の学者から高い評価を得ていたのである。さらに、彼がその学術研究における名声にふさわしい態度を取っていたことも、その子供に宛てた手紙から窺うことができる。

## 二

梁啓超はかつて十四年間余り（一八九八年から一九一二年まで）にわたり日本での亡命生活を余儀なくされたが、日本滞在中には、数多くの日本の政治家や知識人らと交際した。日本に残された梁啓超に関する資料の中には、彼の学者としての身分に触れた、或いは梁啓超の論著を評価したものが多少ある。そこで、これらの資料に基づいて、同時代の日本人から見た晩年の梁啓超の学者像を明らかにしたい。

まず、筆者が調べた関連資料の中で学者としての梁啓超に関する日本での最も古い記録を検討する。勝海舟は『氷川清話』で「康も梁もエライ学者だが、政治家ではないよ。（中略）ドーも正直で一本調子の学者だよ」と語る<sup>(10)</sup>。この言葉は一見すると、学者としての梁啓超を高く評価したもののようである。しかし、『海舟座談』の関連年表の記録を合わせてみると、梁啓超の師である康有為は、戊戌変法が失敗

して日本に亡命したばかりの時に、勝海舟を訪問したことが確認できる<sup>(11)</sup>。「政治家ではない」という評価は、明治日本において有名な政治家である勝海舟が、康有為と梁啓超二人の政治面での失敗（戊戌変法の失敗）を皮肉つたものだと考えられる。また「エライ学者」や「正直で一本調子の学者」という表現は二人が所詮書生に過ぎないことを皮肉っているのではなかるうか。そのため、勝海舟の「エライ学者」という論評は、素直に梁啓超を褒め讃える言葉として理解することができないことがわかる。

一方、梁啓超の学術研究に対して、清水安三は以下のように評価したことがある<sup>(12)</sup>。

何れにもせよ彼の学術が或に蕪にして博きは第自身の仰せの通りである。然りと雖推移多き現支那に在りて、彼の如く幾度もエポックを造らうと欲する思想家に、終始一貫を求むることは、求むる者の方が無理である。（中略）されば一面に於て梁啓超は現支那思想界を作ったとも、また現支那は此の如き思想家を生んだとも称し得やう。我等は支那思想界のパロメーターとして彼を重実に思ふ例へば蠹の様に四度でも五度でも変化し行く人であるから、本人も面白からうが見てる方でも飽きが来なくって感興が湧いて誠に結構である。

右の資料を見ると、清水安三は梁啓超の学問の幅が広範であることを認める一方、梁啓超を学者というよりもあくまで現代の支那の思想界に影響を与えた「思想界のパロメーター」と評価していることが分

かる。

また、今関天彭も、梁啓超に関して次のような記述を書き残している<sup>(13)</sup>。

だが文章の才に秀でた氏は、白話文を書いても実に甘い。一昨年歐洲媾和会議から帰って、遊欧心影録を白話文で発表した<sup>(14)</sup>が、その手際の鮮かなる事は、我国の故福本日南翁や徳富蘇峰翁の書いた口語体の文章の如く、口語体作家の真似られぬ妙味がある。聞くころに依れば、氏には新文学の開祖となる抱負があると云ふ事だ。氏の春秋は尚富んで居て、如何に発展して行くか未知数であるが、文章方面から氏の越方を回顧するときは、行先も大概予想が附くのである。

梁啓超の『遊欧心影録』が白話文で発表されたのは、日本の徳富蘇峰などを真似たからであることが分かる。この点について、蘇峰自身も「梁啓超君の清代學術概論」という文章に「吾人は決して梁啓超君の所謂の新文体が、我が民友社の新文体と、直接の關係ありとは云はぬ。併し全く没交渉と云ふは、事実を誣ふるものだ」という見方を示した<sup>(14)</sup>。ちなみに、同じ文章の中で、蘇峰は梁啓超の學術思想に対して以下のように言及している<sup>(15)</sup>。

梁君は縦横の策士である。又た曾て革命的運動家であつた。時としては、外国に於ける逃竄の浪人者たり。時としては、自國に於ける内閣の閣員たり。(中略)然も究極するに、梁君は天成の新聞

記者だ。梁君にして若し他の野心を抛擲し、新聞記者として立たば、東洋唯一の大記者と言はざる迄も、その級中の或位を占むるに難からぬであらう。(中略)併し梁君は、要するに新聞記者だ。哲學家でもなければ、思索家でもない。云はば理想と、現実との境目に跨りて、一世の輿論を鼓吹するの天職を有する一人だ。

専ら梁啓超の學術の論著を評論する文章であるにもかかわらず、学者としての梁啓超の活躍には全く触れていない。蘇峰は梁啓超をあくまで策士や、運動家として外国に滞在する反政府の逃亡者であると認識していた。おそらく蘇峰には、梁啓超は学者であるという認識があまりなかったのだろう。

以上から、日本において、梁啓超が思想家や政治家として、また逃亡者として人々に知られていたことが分かる。特に一九二〇年代の日本人の記述には、梁啓超は新聞記者として高く評価されていたことが示される。しかし、学者としての梁啓超への言及はほとんど見当たらない。晩年に政治活動から遠のいてからは、それ以前と比べて日本人からあまり注意を払われなくなったのではないか。つまり、晩年の大衆教授としての梁啓超とその學術・教育活動は、そもそも明治日本の知識人の関心の対象にすらなっていなかった可能性が高いのである。また、第一節と合わせると、梁啓超は学者ないし教育者として、同時代の日中兩國において異なつた評価を受けたことが分かる。中国では、晩年の梁啓超は大学教授として活躍し大変注目を浴びた。日本では晩年も依然として新聞記者などとして知られていたが、学者としてはあまり評価されていなかった。それでは、晩年の学者としての梁啓

超の論著に対して、同時代の日中両国の知識人は如何なる評価を下していたかのだろうか。

### 三

まず、中国における梁啓超の論著の評価に目を向けたい。梁啓超と同時代を生きた人々の記録が複数残されている。楊鴻烈は「回憶梁啓超先生」という文章で、梁啓超の代表的な論著『清代學術概論』と『中国歴史研究法』に対して以下のように述べた<sup>(16)</sup>。

私の記憶の中では、私が梁氏に師事して学問をはじめたころ、私は梁氏の学問に対する情熱に心から敬服していた。例えば、一九二〇年（民国九年）のたった一年間でも、梁氏は『清代學術概論』、『老子哲学』、『孔子』、『墨経校釈』及び数多くの中国の仏教の歴史に関する論文を書き上げた。一九二二年（民国十年）、『墨子学案』を書き終えた。一九二二年（民国十一年）、陸続と『中国歴史上民族之研究』、『先秦政治思想史』、『中国歴史研究法』等、及び『講演集』を発表した。彼が三年間に書き上げた著述は計百万字余りになり、当時の学术界に一定の影響を与えた。

この文章は梁啓超が清華大学国学研究院で教鞭を執っていた時の学生楊鴻烈が恩師である梁啓超について書いたものである。「一定」というやや控えめの表現から、晩年の梁啓超は学問に専念して大量の著

述を残したものの、弟子である楊鴻烈の目からみても、それほど大きな反響を引き起すことと捉えざるを得なかったことが分かる。

次に、鄭振鐸が一九二九年に亡くなった梁啓超を追悼するために書いた「梁任公先生」という文を検討してみる<sup>(17)</sup>。

庚申年に出版された『清代學術概論』は彼が清代の学術に対して作り上げた体系的な長編の評論文である。しかし、ただ広く論述して、中には奥深い研究の成果があまりなかった。ただ、彼の康有為及び彼自身の今文学運動に対する批評は、確かに含蓄に富んでいると思う。

鄭振鐸は『清代學術概論』に対して、冷静な評価を行い、この書は清代の学術に対する体系的な評論であるが、内容の多くは表面的なものに留まっていて、あまり深く掘り下げた研究が行われていないと指摘した。

梁啓超の『中国歴史研究法』に対する評価も見てみよう。張星烺は、「梁任公歴史研究法糾纏」で以下のように批判している<sup>(18)</sup>。

梁任公氏は今我が国の文学の大家であり、最近『中国歴史研究法』を出版された。（中略）九七、九八ページにはひどいミスがあるため、ここではこれらの誤りに対して以下のように修正する。

（中略）私がこの文章を書いたのは、他人（梁任公氏）を攻撃するためではなく、私自身も任公氏を崇拜する一人である。（中略）私がこの文章を著した意図は、出まかせで自分の名声を損なった所

謂有名人を戒めるためだけでなく、若者に有名人の著作に対して、盲従しないで、良し悪しを鑑別する能力を持つべきであると戒めるためでもある。

張星焯は梁啓超が中国の文学研究の「大家」であると一応評価したものの、彼の『中国歴史研究法』に多くの誤りが存在しているとも指摘した。張星焯のこのような指摘は梁啓超を攻撃するためではなく、その『中国歴史研究法』の厳密さを缺けるのを批判することを通じて、若い研究者を戒めるためのものである。とは言っても、梁啓超の学問研究において杜撰な一面も存在することは明らかである。

最後に、もう一人の梁啓超の弟子である張蔭麟の評価もみてみよう<sup>(19)</sup>。

学術については、世の人は梁啓超氏に対して褒貶相半ばする見方を持つている。任公氏は学術の面において、最も造詣が深いのは史学である。だが、学者が梁啓超に対して、批判したのも史学である。彼の考証学に関する文章は、日本人のものを剽窃していない所は、ミスだらけで、全ての文章に検討が必要である。実は、任公氏の史学における貢献は、考証学にあるのではない。任公氏は才識はあるが記述は疎かであり、仕事が多くても分野が広いばかりで深くないため、考証学は彼に全くあっていない。彼が晩年に考証学に取り組んだのは、時流を追ったためである。

張蔭麟は師の学問について、歴史学への貢献を高く評価する一方、その論著に日本人のものを剽窃した箇所もあり、さらに事実誤認の箇

所もあることを率直に述べた。

以上のように、梁啓超は清華大学国学研究院の教授として招聘され学者として名声を得た一方、その論著については、当時の中国において意外にも決して高い評価を得ていたとは言えないことがわかる。その理由については、次節の日本人の評価と併せて検討してみたい。

#### 四

前述したように、梁啓超が学者として活躍していたという事実に当時の日本人はあまり関心を寄せていなかった。では、梁啓超の晩年の論著、とくに中国で批判の俎上に載せられていた『清代學術概論』と『中国歴史研究法』の二書が、当時の日本の知識人から如何なる評価を受けていたかを考えたい。まず、梁啓超が梁思順に宛てた手紙の一部を抜粋し、検討する<sup>(20)</sup>。

私は日本に遊びに行きたいが（日本人は私の近年の著作の何部かを翻訳した。私たちは六角銭で売っているが、彼らは二圓五十銭で売っている。本当にびっくりしたよ。）、三、四千金は準備しておかないと、きっと行くことが出来ないだろう。

梁啓超は自分の著作の何冊かが日本語に翻訳されて、出版されたことに言及する。このことに対して、些か誇りを感じているようにも読み取れる。これらの著作が如何なるものであるかについて従来の研究

には考察が見られないが、確認したところでは、一九二一年に商務印書館により出版された初版の『清代學術概論』の定価は六角五分であり、一九二二年に東京で東華社により出版された橋川時雄訳『清代學術概論』の定価は二圓五十錢であった。梁啓超の言う「私たちは六角で売っているが、彼等は二圓五十錢で売っている」本とは、おそらくこの『清代學術概論』ではないかと推測できる。そのほか、梁啓超の著書のみならず、論文やエッセイなども日本で多く出版されたことが分かった。こうした状況から、梁啓超の論著は当時日本の学者の注目する所であったことが垣間見える。

続いて、『清代學術概論』を取り上げて検討したい。『清代學術概論』の日本語の訳本については、馬恒らに考察がある。それによると、『清代學術概論』は一九二一年に中国で出版された。翌年には、すでに三種類の日本語版が出版されている。それから、五十年を経て、七十年代に至ると、さらに二つの異なる訳注本が出版された<sup>(21)</sup>。これらの五つの訳本を確認したところ、一九二二年の橋仁太郎の訳本が他四つと大きく異なっており、『清代學術概論』のもともとの章立てを編集し直したうえで、自分の考察を加えてこの本を翻訳している。訳者の多さからは、この書が当時の知識人から注目され、日本で人気を博したことが窺われる。この書について、徳富蘇峰は次のように述べている<sup>(22)</sup>。

近來支那人の著述としては、胡適君の『中国哲学史大綱』と、梁啓超君の『清代學術概論』とが、現代支那の思想を代表するであらう。左なくとも、代表的作物の一に相違あるまい。(中略) 梁君は此の考証学の原委、隆替に就て、鳥瞰的觀察をした。其の所説

は、挙一明三、頗る要領を得てゐる。併しながら此書の精彩は、却て下半部の『今文学運動』の点にある。(中略) 本書の精彩は、『今文学運動』の部分にあり。『今文学運動』の精彩は、梁啓超君が梁啓超君を論評したる部分にある。

『清代學術概論』が当時の中国の思想を代表する書物であり、近代中国の最先端の研究方法を用いた學術論著でもあると評価する。さらに、梁啓超が事実を重んじて、科学的な研究方法をもって自己評価をした箇所がこの本で最も精彩を放っているとする。近年、余時英も同様の考えを示し、さらなる詳細な論述を加えている<sup>(23)</sup>。

清代考証学においては、「科学方法」が中国の人文研究における新たな発展であり、十五世紀イタリアのヴァッラ（ロレンツォ・ヴァッラ）に代表される真偽を見分ける考証学とちょうど東西において軌を一にしている。そのため、胡適氏は「五四」新文化運動を欧米のルネサンスによく似ているとす。その時から、彼は国内外における講演で「五四運動」に言及する時、すべて「中国文芸復興」と言い換えるようになった。それと同時に、私の読んだ梁啓超の『清代學術概論』では、清代の學術を文芸復興に喩える。それで、私はこの見方には非常に説得力があると思う。

余英時は、胡適が五四新文化運動をヨーロッパのルネサンスになぞらえたのと同じように、清代考証学は梁啓超が『清代學術概論』で提示した「科学方法」が中国の人文研究についての新たな発展であると

指摘した。つまりこの本からは、中国の伝統に立脚して近代の學術研究へと新しい道を開こうとしていたという姿勢が表れている。ただし、「科学方法」というあまりに新鋭の學術研究法は、当時の中国の知識人あまり理解されず、逆にいち早く「科学精神」を徹底した明治日本人の人々からは共鳴を得られたのであろう。

次に、梁啓超のもう一つの論著『中国歴史研究法』の日本での評価について考察を加えたい。この書は訳本が日本で出版されるよりも前に、当時の有名な歴史研究者たちから大いに注目されていた<sup>(24)</sup>。また、田中萃一郎の「中国歴史研究法」を見てみよう<sup>(25)</sup>。

それで昨年は天津の南開大学で、『中国歴史研究法』を今春は北京の清華学校で『五千年史勢鳥瞰』を講じ、而して今回先づ昨年の講義を『中国文化史稿第一編』として上海の商務印書館から出版された。(中略)併し第二、第四、第五の三章は支那の歴史を修めんとする人に取て必読の価値を具へて居ると評してよい。読んで参考になることも尠く無い。(中略)兎に角梁氏が今なほ西夏字を女真字と思ひ込んで居らるるならばそれは実物なり拓本なりを目撃せられぬが為であらう。

梁啓超が『中国歴史研究法』を創作した経緯の一部が記されている。後半部分では本書中に見られる誤謬にも言及するものの、書物そのものは「支那の歴史を修めんとする人に取つて必読の価値を具えて居る」と高く評価した。続いて、当時日本の史学研究における大家であった桑原隲蔵が梁啓超の『中国歴史研究法』をどのように評論したかに目

を向けたい<sup>(26)</sup>。

今梁啓超氏が欧米の史学研究法に本づき、中国の史学の革新の急務を提唱し、『中国歴史研究法』を公にしたことは、実に吾が輩の所見に一致するもので、吾が輩は自身一個の為に満足を表するのみでなく、広く支那界の為に祝福したい。吾が輩は衷心より史学研究に志ある中国人士に、先づこの新著を参考せんことを慫慂し、且つこの新著の発行は、将来の支那史界に相当の影響を及ぼすべきを期待して居る。(中略)所が梁啓超氏のは流石にすべて支那の例証を挙げ、支那の記録を引いて居る。この点で支那史学専攻の人達に相当参考の価値が多い。吾が輩は支那史学研究を志す我が国人にも、『中国歴史研究法』の一読を慫慂したい。(中略)梁啓超氏の所論は大体に於て妥当と思ふ。(中略)殊に過去に於ける支那歴史の最大欠点はその非科学的なることを痛論して、(中略)又、「(中略)我国治史者。惟未嘗以科学方法：(我が国の史学研究者は「科学方法」を使つたことはない。)」といへるは、吾が輩平素の持論―単に史学のみでなく、一切の支那学は科学的基礎の上に建て直しを行はねばならぬといふ―と全然一致するもので、吾が輩は勿論双手を挙げて之に賛同せなければならぬ。ただ梁氏の科学的研究の必要を主張する所、やや談つて詳ならざる憾がないでもない。(中略)支那の史学者は一般に道德と文章とに重きを置き過ぎる。梁氏は褒貶を主とする主観的歴史を排して客観的歴史を奨め、道德論に拘束されぬ用意を説いて居るが、文章に関しては殆ど何等の注意を述べてない。(中略)されど梁啓超氏の著書の中

には、主張の徹底を缺ける点、又事実の誤謬を伝へたる点が甚だ  
尠くない。

『中国歴史研究法』の欠点及び錯誤をはっきり指摘するものの、論  
述方法が欧米の史学研究法に基づいており、科学的な研究方法を用い  
て、豊富な例証を挙げているため、東アジアの中国史学研究の専門家  
が参考とする価値があると高く評価する。

以上から、第三節では、晩年の学者としての梁啓超の學術論著『清  
代學術概論』と『中国歴史研究法』の二書は、当時の中国においては  
あまり評価されなかったのに対して、当時の日本の政治家や学者の関  
心を寄せ、一定の評価を得たことが分かる。

## おわりに

清華大学国学研究院で教鞭を執ったときの学生らによる回憶文か  
らは、晩年の梁啓超が中国では学者として高く評価されていたことが  
分かった。學術研究の面においては、彼は多方面にわたって大きな成  
果を収めた。その研究がさほど深くまで行われていなかったとしても、  
彼は学問を通俗化して、より多くの人々に理解できるようにしただけ  
ではなく、「科学精神」「科学方法」を使って学問を行うことで中国の  
近代文学の研究及び史学研究などに先鞭をつけた<sup>(27)</sup>。また、子供た  
ちに宛てた手紙からは、父親としての愛情と同時に、学者としてその  
學術に対する優れた見識も窺えた。一方、日本の同時代の学者によっ

て書かれた文章からは、梁啓超が政治家や新聞記者として高く評価さ  
れていたが、学者としてはあまり注目されていなかったことも見えた。  
學術研究において、梁啓超は多方面にわたって数多くの論著を残し  
ている。本稿は『清代學術概論』や『中国歴史研究法』を代表として  
取り上げ、日中両国における梁啓超の論著への評価に対する考察を行  
った。その結果として、中国においては、一部の学者から注目された  
が、あまり評価はされなかったことが分かった<sup>(28)</sup>。一方、当時の日  
本の學術界においては数人の学者らに高く評価された。これはなぜか  
という点、当時の日本の学者は梁啓超の論著の内容を評価したのでは  
なく、論述の際に使われた理念や方法を評価したためだと思われる。  
彼らは梁啓超が學術研究を行うときに、中国で古くから使われてきた  
非科学的な方法を批判して、伝統の枠組みを脱出し、西洋近代文明を  
日本経由で中国に取り込もうとした姿勢を評価して、特にこれらの論  
著を書き上げた際に運用した「科学方法」及びそこに表された「科学  
精神」を認めたのである。

以上から、学者としての梁啓超本人及びその論著に対する当時の日  
中両国における評価は、明らかな対照をなしていることが読み取れた。  
こういった差異が生じたことには、両国の異なる時代背景が深く関わ  
っているのではないかと。特に梁啓超の論著に見られる「科学」と「民  
主」という理念は当時の日本の學術理念に合致して、東アジアの  
時代の風潮に呼応していたと考えられる。一九二〇年代の日本の學術界  
においては、西洋近代研究で提唱された「科学方法」及び「科学精神」  
が既に定着していたが、当時の中国の學術界においては、梁啓超らを  
代表とする知識人が「科学方法」及び「科学精神」を初めて學術研究

に運用して中国に輸入しつつあるころであった。ただし、すでに狭間氏らが指摘したように、梁啓超が提唱した学問のやり方は日本式のまま中国に輸入するものではなく、日本式のやり方と中国の伝統的方法とを合わせて、中国の当時の時代の要請に応えられるようにした梁啓超式の新「知層」であった。

ここまで考察して、梁啓超の学者像がようやく浮き彫りとなったといえるであろう。彼は生涯を通じて政治活動家や新聞記者や学者などとして多方面にわたって活躍し、特に政界や新聞界に大いに貢献して、国内外に名を馳せた<sup>(29)</sup>。当時の彼自身とともに清華大学国学研究院の「四大導師」として並び称される王国維、陳寅恪、趙元任の三人が学術研究に集中したのと異なり、梁啓超はある特定の学術領域に専念することよりも、学問の幅広さのほうに重点を置いていた。学術界に新しい研究理念を導入し、「科学」を基点とする新しい研究方法を唱えることを重んじた一人の学者だったのである<sup>(30)</sup>。それゆえ、ほかの三大導師が日中両国においてともに高い評価を得られていたのに対して、梁啓超に対する学者としての評価は、やや複雑な様相を呈することになったのであろう。

## 注

- (1) 丁文江、趙豊田編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社、一九八三年）を参照。
- (2) 狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』（みすず書房、一九九九年）を参照。なお、本論文を作成する

に当たって、同氏「梁啓超 東アジア文明史の転換」(岩波書店、二〇〇六年)も併せて参照した。

- (3) 注(1)前掲書、九〇四頁「先生返国後一年中、除從事著述外、計所着手創辦的事業、有發起中比公司、承辦中国公学、組織共学社、整頓『改造』雜誌、『解放与改造』雜誌自今年第三卷起改今名)、發起国民動議制憲運動等故事」を参照。

- (4) 梁啓超「致思順書」(一九二三年九月六日)(張品興編『梁啓超全集』北京出版社、一九九九年、六二〇二頁)「我這幾天為救濟會事頗耽誤些正經功課、一星期後就要到清華講學去了」。

- (5) 蔣善国「我所認識的梁啓超与王国維」(中国人民政治協商會北京市委員会文史資料研究委員會編『文史資料選編』第二四輯、北京出版社、一九八五年、三五〇三八頁)「梁任公(啓超)先生在国学研究院授中国文化史(中略)次年、余完全助任公先生授国学研究院課程(中略)該院以吳雨僧(宓)氏為主任、共設五研究室(中略)任公先生生性好動、而且富于領導力、故其在研究院時實領導一切、不僅在教授一方面已也(中略)五研究室中、在成立之初、唯靜安及任公二先生有助教(中略)靜安先生之学深邃湛遠、任公先生之学偉大宏博、尤富於組織力」。

- (6) 王森然「梁啓超先生評伝」(王森然著『近代二十家評伝』、杏岩書屋、一九三四年、一八九〇二一〇頁)「九年、春、帰国(中略)乃専心著述、纂修文史(中略)如此十年不入政界、専以學術以貽学者(中略)但其学識文章、実為一世所推重(中略)現時中国無論南北、能如先生之以学識文章、負当代之盛名、而以慈祥和藹之態度、携提後進、誠懇指導者、恐再無第二人矣、先生実

絶代之文宗良師也」。

- (7) 梁啓超「致孩子們」(一九二七年八月二十九日)(注(4))前掲書、六二七三(六二七四頁)「關於思成學業、我有点意見。思成所學太專門了、我願意你趁畢業後一兩年、分出点光陰多學些常識(中略)再者、一個人想要交友取益、或讀書取益、也要方面稍多、才有接談交換、或開卷引進的機會(中略)我國古來先哲教人做學問方法、最重優遊涵飲、使自得之(中略)凡做學問總要「猛火熬」和「慢火燉」兩種工作、循環交互著用去(中略)思成、你已經熬過三年了、這一年正該用燉的工夫。訳文は丁文江、趙豐田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』(第5卷)(岩波書店、二〇〇四年)を引用。

- (8) 梁啓超「致梁思成 林徽因」(一九二八年四月二十六日)(注(4))前掲書、六二九〇(六二九一頁)「你們回來的職業、正在向各方面籌畫進行、一是東北大學教授、一是清華大學教授、成否皆未可知(中略)我想托人介紹你拜他門、當他幾個月義務書記、若辦得到、倒是你學問前途一個大機會。(中略)『中國宮室史』誠然是一件大事業、但拋我看、一時很難成功、因為古建築什九被破壞、其所有現存的、因兵亂影響、無從到內地实地調查、除了靠書本上資料外、只有北京一地可以着手。所以我盼望你注意你的副產工作——即『中國美術史』這項工作、我很可以指導你一部分、還可以設法令你看見許多歷代名家作品」。訳文は島田訳『梁啓超年譜長編』(注(7))全掲書を引用。

- (9) 梁啓超「致梁思成」(一九二八年五月八日)(注(4))前掲書、六二九四頁「昨日楊廷宝來、言東北大學事(中略)廷宝謂奉天建

築事業極發達、而工程師無一人、汝在彼任教授、同時可以組織一營業公事房、立此基礎前途發展不可限量(中略)清華事亦已提出評議會、惟兩事比較、似東北前途開展之路更大、清華是「溫柔鄉」、我頗不願汝消磨於此中、諒汝亦同此感想」。

- (10) 勝海舟述「康有為と梁啓超」(江藤淳、松浦玲編『氷川清話』講談社、二〇〇〇年)一四五頁を参照。

- (11) 『勝舟座談』関連年表(巖本善治編、勝部貞長校注『勝舟座談』岩波文庫、一九八三年、三六〇(三七三頁)二(明治三十一年)一〇月(中略)二七日、シナより宇佐生、一昨日帰国の旨にて來訪。亡命人康有為同伴、その転末を聞く。康氏面会を乞うの旨。(中略)(一一月)一三日、御発車新橋へ奉迎す。松方(まつかた)、その他二面語す。この頃、清国人康有為より來翰。面会を乞う事切なり。」を参照。

- (12) 清水安三「梁啓超」(『支那当代新人物』東京大阪屋号書店、一九二四年、一三二(一六三頁)を参照。

- (13) 今関天彭「梁啓超(任公)」(『清代及現代の詩文界』、今関研究室、一九二五年、七〇(七四頁)を参照。

- (14) 徳富蘇峰「梁啓超君の清代學術概論」(『野史亭語』、民友社、一九二六年、一六八(一八四頁)一八〇頁を参照。なお、このことに関する詳しい考証は、夏曉虹「覺世与伝世——梁啓超の文学道路」(中華書局、二〇〇六年)を参照されたい。

- (15) 注(14)前掲書、一六八(一八四頁)を参照。

- (16) 楊鴻烈「回憶梁啓超先生」(中国人民政治協商會議廣東省委員會文史資料研究委員會編『廣東文史資料』第八輯、廣東人民出

版社、一九六三年、三五～四二頁）「我回憶在追隨梁氏從事學問的初期、對梁氏的用力、實在欽佩。例如梁氏於一九二〇年（民國九年）的一年內即撰成『清代學術概論』、『老子哲學』、『孔子』、『墨經校釋』、以及中國佛教歷史論文多篇。一九二二年（民國十年）著述『墨子學案』。一九二二年（民國十一年）陸續發表『中國歷史上民族之研究』、『先秦政治思想史』、『中國歷史研究法』等等、以及『講演集』。三年間著述、總共一百餘萬言、在當時學術界起了一定的作用。」

(17) 鄭振鐸「梁任公先生」（『小說月報』、二〇卷一號、一九二九年）『清代學術概論』出版於庚申、是他對於清代學術的有系統的一篇長論、但多泛論、沒有什麼深刻的研究的成果。獨有對於康有為及他自己今文運動的批評、確是很足以耐人尋味的。」

(18) 張星烺「梁任公歷史研究法糾纏」（『地學雜誌』、第一二合期、一九二三年、一八～二九頁）「梁任公先生為今我國文學大家、近有中國歷史研究法之出版（中略）至九十七及九十八兩面、見有謬誤特甚之點、不能已於言者、特為糾正之如下（中略）吾作此篇、非有意於攻擊他人、吾亦為崇拜任公文學之一人也（中略）吾作此篇之意、一以箴今代所謂名士、出言不可不慎、致貽令名之累、再則箴青年讀書對於名士之著作、不宜妄從、而宜有鑒定之力也。」

(19) 張蔭麟「跋『梁任公別錄』」（『思想與時代』、第四期、一九四一年）「以言學術、世人于任公、毀譽參半。任公於學、所造最深者唯史。而學人之疵者亦在是。以謂其考掘之作、非裨販東人、則錯誤紛出、幾於無一篇無可議者。實則任公所貢獻于史者、全不

在考掘。任公才大工疏、事繁驚博、最不宜於考掘。晚事考掘者、徇風氣之累也。」

(20) 梁啟超「致梁思順」（一九二三年一月二十九日）（注（4）前揭書、六一九六～六一九七頁）に「我很想去日本頑頑「玩玩」、（日本人把我近年的著作翻譯出好幾部、我們壳六角錢、他們壳二圓五十錢、可驚）但非有三、四千金不敷用、怕未必能去」とある。

(21) 馬恒、房鑫亮「經典的另一面——梁啟超的『清代學術概論』的諸日訳本」（『福建論壇』、第七期、二〇一八年、八四～九二頁）に「自一九二二年『清代學術概論』單行本問世至今、不僅有諸多中文單行本、還有諸多外文訳本行世、尤以日訳本最多。迄今為止、該書共有五種日訳本、即：一、橋仁太郎訳『清代學術概論』、『日本讀書協會甲種會報』第十九號（一九二二年出版）、二、渡辺秀方訳『清代學術概論』、読画書院一九二二年出版、三、橋川時雄訳『清代學術概論』、東華社一九二二年出版、四、山田勝美訳注『清代學術概論』、大東文化大學東洋研究所一九七三年出版、五、小野和子訳注『清代學術概論——中国のルネッサンス』、平凡社一九七四年初版、一九八二年、二〇〇三年兩次再版」とある。

(22) 前掲注（15）を参照。

(23) 余英時『余英時回憶錄』、允晨文化實業股份有限公司、二〇一八年、二七～二八頁）「清代考証學則是「科學方法」在中國人文研究中的新發展、與十五世紀義大利的瓦拉（Lorenzo Valla）所代表的辨偽考証、恰好東西輝映。這樣一來、胡適便把「五四」新文化運動刻畫得與西方文芸復興十分相似。從這時起、他在中

外各地演講「五四運動」都一律稱之為「中國文芸復興」。同時、我又讀到梁啓超的『清代學術概論』也是以文芸復興與清代學術相比擬、我因此頗為此論所說服。

(24) 『中國歷史研究法』の日本語版の訳本は小長谷達吉により日本語に翻訳され、一九三八年に改造社から出版された。

(25) 田中萃一郎「中國歷史研究法」(『史學』卷一第三号、一九二二年、一二四頁)を参照。

(26) 桑原隲藏「梁啓超氏の『中國歷史研究法』を読む」(『支那學』卷一第十二号、一九二二年)を参照。

(27) 注(17)前掲に「他在文芸上、鼓蕩了一支像生力軍似的散文作家、將所謂懺懺無生氣的桐城派文壇打得個粉碎。他在政治上、也造成了一種風氣、引導了一大群的人同走。他在學問上、也有了很大的勞迹、他的勞迹未必由于深湛的研究、却是因為他的將學問通俗化了、普遍化了。他在新聞界上也創造了不少的模式、至少他還是中國近代最好的、最偉大的一位新聞記者」とある。また、伍庄「祭文」(『梁新會』、中國憲政黨駐美國總支部印送、一九二九年)に「君善用科學方法整理國故、收浩瀚無涯、如示諸掌、能令讀者心受言詮」とある。錢玄同が陳独秀に宛てた(「錢玄同致陳独秀」、水如編『陳独秀書信集』、新華出版社、一九八七年)手紙に「梁任公實為創造新文學之一人。雖其政論諸作、因時變遷、不能得國人全體之贊同、即其文章、亦未能尽脱帖括蹊徑、然輸入日本新體文學、以新名詞及俗語入文、視戲曲小說與論記之文平等(梁君之作『新民說』、『新羅馬傳奇』、『新中國未來記』皆用全力為之、未嘗分輕重於其間也。)此皆其識力過人處。

鄙意論現代文學之革新、必數梁君」とある。

(28) 余英時「壽錢賓四師九十」(「錢賓四先生論學手紙」の付録一、『錢穆與中國文化』、上海遠東出版社、一九九四年)に「梁任公於論學內容固多疏忽、然其文字則長江大河、一氣而下、有生意、有浩氣：近人对梁氏書似多失持平之論、實則在『五四』運動後梁氏論學各書各文均有一讀之價值也」とある。こうした記述からも梁啓超の論著が當時においてはあまり評価されなかったことが裏付けられるだろう。

(29) 徐彬「梁啓超」(『時報』、一九二九年一月二十六、二十八日)に「梁涉歷各界、而以報界為最著。黃遠生君嘗尊之為報界大總統(中略)總梁氏一生、以純旧之學者起(科舉)、以較新學者終、中間之政、報兩界則迭為循環、互相間雜(中略)可云無憾。然梁氏之名及所建樹、仍以報為最著」とある。

(30) 梁啓超「蒞同學歡迎會演說辭」(『梁啓超全集』、第四冊、北京出版社、一九九九年、二五二一、二五二九頁)に「昔龔定庵有言、但開風氣不為師、吾夙以其語有妙諦而服膺之。吾不敢自謂能開風氣也、然窃有志焉、至於為師、則實不敢以自居。」とあり、施耐德著、関山、李貌華訳「導論」(『真理與歷史』、傅斯年、陳寅恪の史學思想與民族認同)、社会科学文獻出版社、二〇〇八年、一一〇―一二頁)に「梁、章兩位採取的方式各不相同、有時甚至是对立的、但是他們最終都要求結束這種以『天子』為宇宙秩序代表作中心的傳統政治統治形式。(中略)他們開始尋找一條回到較具文化特色和中国影響的世界觀與史學。梁啓超和章炳麟不僅是這些人的宗師、也親自參與了其事」とあり、「付録二 世界

歷史与歷史相對主義的問題——一九一九年以後梁啓超的史學」に  
「梁的觀點則需要歷史學家更廣範深入地涉足社會与政治、監持  
連貫的先驗的歷史使然。陳寅恪的學術理念監持以民族精神的  
斷變化作為歷史延續性的基礎、則決定了他在社會政治方面不  
有活躍的作為」とある。

(ちよう しゅくくん、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)